鐘の音は深夜響く

浅緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鐘の音は深夜響く

【Ｎコード】
Ｎ６５０７Ｑ

【作者名】
浅緋

【あらすじ】
同じ家に住んでいる彼は私に朝しか姿を見せない。
避けられてる！？しかし毎朝起こしてくれて朝食まで用意してくれている。
私は彼が何を考えているかわからない。
そんな日常だったはずなのに
私が友人に誘われて合コンに行ったことによって私と彼の関係が動き始める。

私は彼に嫌われているのだろうか。
それとも……

歯車が動き出す

バタンと扉が閉まる音が聞こえた
玄関の扉を閉じる音を聞こえさせない彼は何を思って自分の部屋の
扉を音を起てて閉じているのか

私は彼がわからない

彼は何時も私が部屋に篭るころ帰ってくる
私が部屋を篭るとき、大抵は１２時を回っている

同じ家に住んでいるはずなのに私に姿を見せることなく部屋に入る彼
隣の部屋が開く音が聞こえなければ私はこんなにも悩んではいなか
ったのに

朝眩しさを感じて目が覚めた

目を開けると目の前に彼がいた
夜、姿を見せようとしない彼は毎朝私を起こしにくる

「…おはよ、う」
「……おはよう。ごはんできてる」
「…うん」

私が目を開けるとき毎回彼が目の前にいる
一寸も微笑んでいない、真顔の彼

目を開けたばかりの私と眼が遭う
私が彼に朝の挨拶をすると返してるれる
朝は誰もが忙しいはずなのに私の分まで朝食を準備してくれている

だからだろうか
私は彼に避けられているのかそうでないのかわからない
彼が私のことを嫌っているのかそうでないのかわからない

それともただの義務感が彼にそうさせているのか

先に家を出た彼のことを考えながら身支度をする

彼は朝にシャワーを浴びたのか。それとも夜何処かで浴びてきたのか

そう考えながらも女の子といたんだろうと何処か確信めいたものが
自分の中にあった
きっとそこで済ませてきたんだろう、と

「そうならそうと言ってくれればいいのに」

最後のボタンを止めながら思わず呟いてしまった

「え、今日？」
「急にゴメン！なんか相手方が1人増えたからこっちもよろしくなんて言ってきてさ。そっちの都合なんだから1人ぐらい足りなくてもいいじゃんって言ったんだけど、どうしてもって言うもんだから

…」
「それは急だね。でもなんで私？私、合コンなんて行ったことないからもたもたして邪魔になっちゃうよ？」
大学の講義も終わり、近くのカフェに友人と立ち寄った
友人が私には頼み事があるというので落ち着いて話せるところに行こうということになったからだ
話を聞いてみれば合コンの誘い、ただそれだけだった
「大丈夫だって。今日の相手は名門大学だからいつもよりは落ち着いた会になると思うんだよね。だからこそ誘ったんだけど？」
「……なるほど。でもどうしようかな」
普段あまり用事がない私は大学が終わるとすぐ家に帰る
朝以外彼はいないからほぼ独り暮らしと同等だった
だから何時もより帰宅時間が遅くても何か言ってくる人はいない
「家にいても暇じゃない？ねぇ、行こうよ」
「うーん……」
「彼氏もいないんだしさ。この辺で作っておいた方がいいって。今日なんか絶好の機会だと思うけどな！」
「彼氏、ねぇ……」
そんなに私を行かせたいのか早口で言ってくる友人
相当熱が入ってるのか身を乗り出して熱弁している
そして私が行く方に傾きかけてるのを察した友人はさらに言葉を繋げる

「そうだよ！いた方がいいって！だって大学入ってから1人もいないでしょ、彼氏」
「まぁそうだけど…」
「なんでそんな余裕なの！ね、行こうよ！たまには深夜帰りになっても大丈夫でしょ！」

深夜帰りと聞いてふと彼のことを思い描いた
言われてみると彼はいつも深夜帰りだが私は深夜に帰宅なんとことしたことがない
私は密かに反抗心が沸き上がるのに気付いた

今日は私が遅く帰ってやる

そんなことをしたところで彼は何も思わないだろうけれど
連絡も入れないでいい
大学にいて帰宅するのが遅くなったときは一応メールで一言伝えていた
けどもういい

「……行く。どこでやるの？」
「ホント！よかったー。あ、お店はこの近くだから。私たちも行ったことあるとこ！」

「じゃ、1人まだ来てないけど始めますか。かんぱーい」
男性側の幹事が開始を告げた
机には前もって注文していた料理がたくさん置かれている

私は一番端の席、隣には友人が座っている
とりあえず向かい合わせのまま始めるようだ
そして私の前にはまだ来ていない人の席がある

「あー緊張するなぁ。…えー法学部に所属？してる浪川辰巳で今回は目の前に座ってる女に脅されてセッティングしましたー…ってテーブルの下で蹴ってくんな、お前」

各々印象が残るようなアピールもとい自己紹介ががが始まった

どうやら男性陣は法学部に在籍してるらしい
女性陣はみんな文学部で同じ専攻を取ってるメンバーである

「神崎澪でーす。同じく文学部の2回生。目の前の男にもう1人増やせと泣きながらせがまれた神崎澪です。以後お見知りおきを！」

私をここに誘った友人、神崎澪の紹介が終わり次は私の番になったみんなの視線が私に集まるのを感じた

「あの……文学部2年、瀬川由理です」
「……え、ゆうりちゃんて苗字瀬川なの？」
「え、そうですけど？」

名前を名乗っただけの私を訝しげな視線をやってきた浪川さん
聞き返すほどの何かがあったらしく私の返答に納得がいってないようだった
一瞬場の雰囲気が固くなったがそれもすぐなくなった

しばらくすると私、澪、浪川さんてそれ以外の４人に分かれていた

「ちょっと辰巳！もう１人どうしたのよ！」

「ん？ちょっと用事があるんだってさ。…遅れるぐらい多目に見ろよ。俺、相当無理矢理誘ったんだかんな」

「彼に会うために準備したのに！私だってゆーりを無理矢理誘ったわよ」

「だって前断られたのに今日ダメ元で誘ったら行ってもいいっていうんだから…寧ろダメ元で再び誘った俺に感謝しろ」

澪はまだ来ていない人目当てで急遽その人数合わせに私を呼んだといや、それはいいんだけど澪にお目当てな男性がいたことに驚いた私がそのやり取りを聞いて驚いてるのに気付いた浪川さんは私に説明をしてくれた

「いや、なんかね、こいつがうちの大学の人に目を着けちゃってね。偶然にも同期だったから今に至る、みたいな？」

「だって女子大の構内を歩いてたから目立ってたのよ。顔もいいし性格も良さそうだったなぁ」

「性格ねぇ。悪くはないし、どちらかと言えばいい方だよ。けどな少し不器用だよ、アイツは。今日は一応お前んとこの大学の文学部って言ったら興味を示してね」

「え、そうなの！？誰かいるのかな！？」

「さぁ、どうだろうかねぇ」

「もしかしたら私だったりして！？話しかけられたとき一応学部だけは言ったんだよね。覚えてくれてるのかも」

恋愛体質な澪は妄想やら想像やらで赤くなっていた

本人もまだ来ていないと言うのにそれに呆れた浪川さんは

「バカかお前。そんな都合のいいことがあるか。寝てから言え」
「バカって何！？そりゃ東大学の法学部なんて偏差値高くて無理だけどバカじゃないわよ！」

「ひ、東大学の法学部っ！？」

「ど、どうしたのゆーり？あ、東大学で驚いてる？」
「なんだ知らなかったの？東大学法学部浪川でーす」

浪川さんたちの大学名を聞いて私は驚いた
驚いたと同時に後悔した
東大学法学部なら来なかったのに…
浪川さんはそんな私を意地の悪そうな笑みで見ていた
浪川さんはある程度目星を付けていたんだ

私と彼の繋がりに

けどどういう繋がりかは知らないらしい
だから苗字を聞いて驚いていたんだろう

彼は東大学法学部、学年も浪川さんたちと一緒だ

「はいもしもし……あ、着いた？…なんだもうちょっとか。じゃ、待ってるからはやく来いよー。……もうちょっとで着くって。よかったねー神崎ちゃん。」
「ホント！？じゃあお化粧直してこよー」

浪川さんが携帯を取り出すと誰かと話始めた

やっともう1人来るらしい
澪が化粧直しに行ってしまったため私は浪川さんと2人になった
浪川は空いていた私の前の席に移動して腰を下ろした
そして私を見据えて言った

「ゆうりちゃんはさ、アイツ…璃玖のなに？」
「な、なにって…彼からなにも聞いてないんですか？え、じゃあなんで私のこと知ってるの？」
「んーそう聞かれると悩むな。ゆうりちゃんのことを知ったのはたまたまなんだけど…あ、名前とかじゃなくて顔ね。」

「はぁ…」

「それでとりあえず璃玖の関係者ってことは知ってた。で神崎と会ったとき無理矢理大学の写真を見せられて、それにゆうりちゃんが写ってた。ちょうどその前に神崎の一目惚れの男の話が出ててお互い連れてこようってね」
「だからいきなり今日誘われたんだ」
「うん、神崎のワガママでね。彼を連れてこれなきゃ君も連れてこないって言うもんだから…まぁ俺のワガママでもあるけど」

私とこれから来る彼は澪と浪川の交換条件の材料で利害の一致により呼ばれた面子である
利用されたのは事実だか怒りとかはない
1人で家にいてごちゃごちゃ考えてるよりもこうして適度に緊張してるほうが気は楽である

「や、家にいるより楽しいからよかったかも。でもそんなかっこいい彼と私が条件なんて釣り合ってない気がするけど」
「えーそんなことないよ。俺的にはアイツとゆうりちゃん会わせて

みたいとも思ったし」
「え？それってどういう…」
「ところでさ、ゆうりちゃん指輪なんかしてたりする？」
不審に思ったことを聞き返そうとした私の言葉を遮られ話を代えられてしまった
明らかに不自然に反られた話題
驚いて彼の顔を凝視しても顔色ひとつ変えない
私は諦めてた
こんな裏のありそうな人に聞いてもはぐらかされるだけだろう
なぜ指輪、そう思いながらとっさに左手を眺めた
「指輪してないです。っていうかしたことないかも」
「え、そーなの。もらったこととかないの？」
「えーどうだったかなぁ。ない気がする。指輪のサイズもよくわからない気がする」
染々と左手を見ながら話していたらいきなり手を引っ張られた
とっさに右手をテーブルについて軽く前傾姿勢になった上半身を支えた
何事かと引っ張った張本人を見るとまた笑顔で
「指輪のサイズ、測ってあげる」
て言って指の付け根を触り始めた
「さわってわかるものなの？」
「なんとなくだけど。むむ、この細さは3人ほど前の彼女と同じだ

から…」
「っ…！？」
今度は真剣に話を聞いてるときにさらに手を、いや今度は手首を引かれて腰を軽くあげた状態になった
彼も身を乗り出して耳許で言う
ごめん、怒らせちゃった
なんのことだ
問おうとした私はある声を聞いて体を硬直させた

「お、やっときたな」
「何してるんだ……辰巳」
「何してると思う、璃玖？」
私は店の入口に背を向けているから誰が立っているか見えない
見えないがこの声は毎朝聞いている声と同じだった
ただ普段より声を圧し殺してるようだった

「なんだよー機嫌悪くすんなよ。ささ座って」
ひとり陽気な浪川さんは璃玖を自分が座っていた席に座らせた
浪川さんはこのまま私の目の前に座るらしい
手を離されたわたしはきちんと座り直した
けど璃玖とは目が合わせられなかった
璃玖は静かに私の方を向いていた

「あ、璃玖、皿が逆だ。それ俺の皿」

あえて空気を読んでいないのか、浪川さんのやけに明るい声が遠くに聞こえた

貴方の発した言葉がもう

璃玖の視線はすぐ外れ、彼は料理を食べ始めた
私は彼の目が他に移ったことに安堵する
ちらっと浪川さんを見ると案の定笑っていた、いや、にやけていた

「じゃあゆうりちゃん、いつ買いに行こうか」
「……何を？」

浪川さんは裏がありそうな笑みを一層深くして言った

「何って……指輪だよ、指輪。俺が買ってあげる」
「いえ……けっこうです」
「そんなこと言わずにさ！買ってあげるんだよ？もらうくらい良いんじゃないかな。あ、ほらほら璃玖もっと食べてくれないと新しいのが頼めない」

私と話しつつ、箸が止まっていた璃玖にもっと食べるよう催促をした浪川さん
そうとう器用だ。そして面倒見がよい
それなのになぜこんな性格なのだろう
まだ今日、しかも数時間しか会っていないのに裏を感じてしまう

そんな彼から指輪を買ってやる発言

なにか裏がある、そう思うのも無理はないわけで
そもそも指輪のサイズを測ってもらっただけでほしいとか買ってなどは言ってないのである

別に買ってもらってもやましいことはない
彼氏がいるわけでもないからだ

ただ……
璃玖がいるだけでどうしてこんなにもやましく思えてしまうのだろう
璃玖が着く前はこんな気持ちにはならなかった

どうにもできないもやもやした気持ちを持て余し、居心地が悪くなって飲み物を飲んだ

浪川さんがまた何かを言おうとする
今度は何を言われるのか、発言を止める勇気のない私は冷や冷やしながら言葉を待った

「……お！やっと戻ってきたな、神崎ちゃん」
「え？澪？」
「あーごめんごめん。ちょっと時間かかっちゃって」

浪川さんは化粧直しから戻ってきた澪に声をかける
私は澪が戻ってきたことに心強さを感じた
澪は浪川さんの座っている位置が変わってることに一瞬戸惑ったようだが、目の前に彼がいるのを見つけると嬉しそうに自分の自分の席に座った

「初めまして！私、神崎澪といいます！」
「おい、こら待て。まだ全体に紹介してないのに個人的にすんな。
さーて、やっと全員そろったことだしもう一回やるか、紹介」

「瀬川璃玖。浪川たちと同じ法学部在籍。よろしく」

全員が最初よりも砕けた紹介をし、最後に彼の自己紹介になった
彼が目当てで来ていた澪は今までとは違う熱い視線を璃玖に送っている

それをどこか快く思わない自分がいる

複雑な心境で二度目となった自己紹介
私と璃玖各々の紹介で共通点が一つある
誰かがそれを指摘しないうちに雑談になってしまえ
心の中で願っていた私をよそにやはりあの男、浪川さんが口を開いた

「あ、そーいえばゆうりちゃんと璃玖って苗字、瀬川なんだな」

さも今気付いたというふうに言いのけた彼
やっぱり性格悪いこの男
私と彼の反応を見て楽しんでいるに違いない
悲しいことにびくんと肩を揺らしてしまった
しかし隣に座っていた澪が気付かない程度だったのでよかった

ククっと笑いをこらえている声が聞こえた
私は自分の使っているお皿を見ていたが浪川さんが笑っているんだろうと予想はついた
ちらっと璃玖を見ていると一瞬目があったような気がしたが気のせいだったのかもしれない
璃玖は目の前に置かれている料理を口に運んでいた
彼は何も言わないらしい
私も変にあることないことしゃべってしまいそうなので自分からは何も言わないことにした

そうなると必然的に会話を続けるのは澪しかないわけで

「あ、言われてみるとそうね。瀬川璃玖と瀬川由理……瀬川って結構いるものなんだね」
「ま、現に2人いるってことはそういうことだ。案外世間は狭いっていうし」
「そうよね……この合コンも世間の狭さから始まったし」

浪川さんは私と璃玖のことを澪は澪自信と璃玖のことを言っている
今回は世間の狭さを痛感した

もし浪川さんが私を知らなかったら
もし澪が彼と会っていなかったら
澪が写真を浪川さんに見せなかったら
私が、璃玖が今日の誘いを断っていたら

ここまでくると偶然では片づけられない……しかし必然かと聞かれるとそうでもない
それでも何かを感じずにはいられない

「え、りく君もこれと同じ法学部なのよね？」
「おい、お前。どさくさに紛れて俺のことをこれと呼ぶな。失礼にもほどがある！それに俺は璃玖と同じだって何回言えばわかるんだ？」
「うるさい！本人から聞きたいの」
「……」

辰巳・澪ペアの言い争いをよそに口に箸を運び続ける彼
しばらくすると喧嘩が終わり澪が璃玖に話しかけるようになった
私は浪川さんと軽く話しながら2人の様子を気にしていた
浪川さんもそれを承知で私が話をあまり聞いていなくても気にしないでくれる
……というか彼も2人の会話を気にしていたからだと思う
ただ私たち2人が耳を傾けているのに気付いているのかいないのか、璃玖の口数は少なかった
代わりに気付いていないだろう澪の問いかけ、自分の話が会話のほぼすべてを占めていた
すでに聞いたことのある澪の話を聞きながら飲み物をちびちびと飲んでいた私
グラスの半分以下になったのを気付いた浪川さんは私に一言言って注いでくれた
「ゆうりちゃんってお酒強いんだね」

「……？そう見えますか？……うーん、まだ酔うまで飲んだことないです」
「そう……じゃ、今日は酔うまで飲もう、うん。そうしよう！ほらほら飲んで。あ、イッキは危ないからね、適度にグビグビ飲んで」
急かされてグラスを開けると注いでくれる
さっきは急いで飲んでしまったが今度はさっきみたいにちびちび飲もう
そう思ったとき隣の２人の会話が耳に入った

「璃玖君って一人っ子？兄弟いるの？」
「兄弟は……いない」
「じゃあ、一人っ子なんだ！私と一緒ね！一人っ子だとさ……」

この質問ははっきりと答えた璃玖
なんで、あえてこれに答えたのか私にはわからなかった
澪は璃玖相手に一人っ子トークを展開しているし璃玖は相変わらず相手をしていないし浪川さんは何を考えているのか口をゆがませている
私は手元のグラスを一気にあける
そしてさっきよりも速いペースでグラスを開けていった

遮る腕は誰のため

しばらくしてお開きとなった
本来なら2次会が行われるらしいが私たちではない４人は意気投合したもの同士で飲みに行きたいということで８人での飲み会はここで終わることになる
会計を幹事の浪川さんが全員分をまとめて払ってるとき、ほかの人たちは外に出る
飲み直すという４人はすでに次の店に足を進めていたためそこには４人、私と澪そして璃玖がいた

澪はちゃっかり璃玖に寄り添っている
ずっと璃玖と二人で話していたわけだから当たり前だといえば当たり前
もともと璃玖に会いたくてこの合コンが開催されたわけで
会計を済ませた浪川さんが店から出てくるまで2人を眺めていた

「待たせた！で、これからどーする？俺たちもどっか飲みに行く？それとも今日はとりあえずお開き？」
「えーもっと飲みたい！」
「お前結構飲んでたろ。まだ飲み足りないのかよ」

これからの予定を聞いた浪川さん
最初に反応したのは澪で別の店に行きたいとのことだった
澪はまだ璃玖と一緒にいたいから、だから次の店に行きたいんだろう

そこでまた2人で話したいんだ

そう考えるだけで私はもやもやした感情が生まれる

この分だと澪に引きずられて2軒目に行くことになるはず
そこでまた澪と璃玖の2人を見なくてはならないのは辛い
……私が辛いなんて言う権利はどこにもないのだけれど
だから断ることにした
どう切り出そうか悩んでいた私に浪川さんが話を振ってきた

「ゆうりちゃんはどうする？っていうかどうしたい？」
「私は……帰ります。なんか、調子も悪いから」
「飲みすぎた？言われてみれば顔色が……」

調子が悪い
別に澪と璃玖のことをひがんでのことではない
浪川さんに勧められるがままにグラスを開けていった私
どうやら酔うまで飲んでしまったらしい
思ってみればなんかふわふわした気分になっているし体も心なしか
熱い

「酔うまで飲んだみたい……。あ、3人で次に行ってください。私、
帰りますから」
「由理！1人で帰るなんて危ないよ！」

澪が心配そうに私に言う
私は澪を安心させるように笑みを浮かべながら

「大丈夫だよ、何もないから」

「あ、じゃあ俺が送ってあげるよ」

声の主は浪川さんだった
それはそのはずで璃玖が私にそんなこと言うわけない

お願いも断りもせず浪川さんを見つめる
浪川さんは私のほうに腕を伸ばした
私はそれを客観的にみる

しかし浪川さんの手は私に触れる前に止まることとなった

「辰巳……俺が送っていくからいい。それとそのまま帰るから」

伸ばされた浪川さんの手を遮ったのは彼だった
浪川さんは驚いた表情を浮かべたがそれも一瞬ですぐにあの笑いに変わった
璃玖はそれを無表情で見つめるばかりで何も言わない

私も心の中ですごく驚いていた
いや、もしかしたら隠し切れずに顔に出ていたかもしれない

璃玖が私を送っていく？

そんな展開一寸たりとも想像できなかった
それなのに現に今璃玖の口から言い放たれた

しかし私は自分で納得のいく理由を見つけた

きっと璃玖も家に帰りたかったんだと
私を送るといったのもその口述でしかないんだと

別に理由をつけなくてもいいのに思わずにはいられなかった

「あ、そう？いやいや、わざわざ璃玖が送ってくれるなら俺の出る幕はないよね。あ、そうそう。今日来てくれて助かったよ！おかげで由理ちゃんも来てくれたし」
「……何？」
「まぁ、こっちにもいろいろあるってことかな。あ、またこのメンバーで合コンしよう。…ゆーりちゃんもまた飲もう」
「え、えぇ。機会があれば……」

「帰るぞ」

「え、ちょっ……！……ごめん澪っ、また来週ね！」

いきなり腕を引かれて歩かされ、それに驚きつつ澪に一言断りを入れた
振り返りながらだったからか澪の表情はよく見えなかった

あぁ、澪に悪いことをしてしまった

私の腕を引きつつ、半歩前を歩く璃玖のことを見ながら思った
澪は彼とまだ居たかったはずなのに、もしかしたら彼に送ってもらえるかもと思っていたかもしれない
だって彼は飲み会にきて澪としか話していないのだ
彼の自己紹介以降澪は懸命に反応の薄い彼に話しかけていた
話題によっては会話になっていたし、自分が彼に一番近いと思っても当たり前

ただ私と彼はたがいに知っていて……というか一緒に暮らしている

それを知らない澪はどう思ったのだろうか
私に対して何らかの感情を抱いているだろうか
それとも彼に対して？

わからない
けど勘違いされているのは確実で
次回あった時に本当のことを話せばそれで解決するかもしれない
けど……彼は私との関係を周囲に知られるのを極端に嫌がるのだ

そして今が始まった

以前彼といたときに関係を聞いてきた人がいた
そのときは普通に答えていたのだ

私と璃玖は双子です、と

私と彼は兄妹で誕生日が一緒
要するに双子、というわけだ
それを普通に何も引っかかりもなく答えた
しかしそのあと私は璃玖に

「……俺と双子とか兄妹っていうの、止めてくれる？」

怖かった。それと同時に悲しかった
璃玖は私のことを家族だと、兄妹だと思ってくれてないのかと
まさにその時期から璃玖は私のことを避け始めた

私は彼に嫌われている
そうずっと思っていた
しかし大学に入学してからそれがよくわからなくなっていた
いや、正確には入学直前からだ

入試を終え入学準備をしていた忙しい時期、急に親の海外転勤が決まってしまったのである

両親が海外に行くということはこの家には私と璃玖の２人きりだと

いうこと
家族でそのことを話しているとき私は漠然と璃玖は家を出るだろうと思った
私と2人なんて嫌だろうから

しかし私の予想は外れることになる
むしろ正反対のことを彼は言ったのだ

その場の雰囲気としてはどちらかが1人暮らししてもよい、そんな雰囲気だった
彼はあえてそれに乗らなった、乗ろうと思えば乗れたのに

出国のため空港に向かう両親を玄関で見送る
私は空港まで見送りに行くつもりだったが両親が玄関でいいと言って譲らなかった
タクシーを家の前に待たせ、慌ただしく家を出る両親
私は微笑みながら2人を見送った。私の少し後ろで璃玖も見送りの言葉を言っていた
2人を乗せたタクシーが角を曲がり見えなくなる

本当に行っちゃったんだ……

早くも悲しい気持ちが湧き上がってきたがそんなこともいってられない
家に入るとリビングには璃玖の姿がなかった
またいつものように部屋に籠っているのだろう……私に会わないように

母が作っておいた夕飯を一人で食べソファに座ってぼぉっとしていた

「……ねぇ」
「……っ！」

不意打ちだった
避けられ始めてから彼から話しかけられることが全くなかった
しばらくしてはっと意識が戻ると目の前のソファに彼が座ってこちらを見ていた

いつ振りだろう。こんなにまっすぐ璃玖のことを見るのは

じっと璃玖のことを見ていたら視線をそらされた
……私に見られるのが嫌だったのか
気分が沈むのが分かったが今の状況をやっと思い出した
璃玖が私に何かを聞こうとしている状況を

「な、何？」
「……家事、どうするか決めてない」
「……あぁ、そういえば。全然決めてなかったね」

内心、璃玖に何を言われるのか怖かった
しかし内容はごく普通のもので体から力が抜けた
本来なら両親がいなくなる前に決めておくことなのに今まで決めてなかったし、決めようとも思っていなかった
今、璃玖が言ってこなければ私から言うことはなかったはずだ

なんとなく適当に決めた私たち
はっきりと決めたのはご飯の支度

朝と昼は各自、夜は私が作る

しかし次の朝起きるとどうだろう
璃玖が朝食を作ってくれていた
私が戸惑っていると璃玖は

「食べないの」
「……う、ううん。食べる。おいしそう」

実際おいしかった。もしかしたら私より璃玖のほうが料理がうまいかもしれない……悲しいことに
しかしなぜ彼は私に朝食を作ってくれるの
最初は自分のついでに私のも作ってくれてるのかも、そう思ってたけどしばらくしたら違うことに気付いた
私は朝食はご飯を食べることにしていたし、璃玖が用意してくれるのも和食だ
しかし彼は私が朝食をとるときはコーヒーを飲むだけだった
何かを食べた形跡がないのだ
……そのときはまぁいいかで済ませてしまったのである

2人で生活し始め数か月
以前よりも会話が増えたがそれも最低限の会話でほとんどは事務的会話だった
そして日に日に彼が帰ってくる時間が遅くなっていくことになる
最終的に12時を回ってから帰ってくる
しかも週に1日とかではなく毎日そうなのである

私はそのことを璃玖に聞こうと思って自分から話しかけた
思えば私から璃玖に話しかけたのは初めてだったかもしれない
しかし呼び止めたのは私なのに彼は私の話を聞かずに自分の用件だ

け言って部屋に入ってしまった

「もう俺に夕飯を準備しなくていい……外で食べてくるから」

彼の立ち去ったところでさすがに泣いてしまった
そこまで彼に嫌われているのかと、なぜ今になってそんなこと言うのか、もしかして最初から嫌だったのに今まで言えなかったのかと
私は彼の夕飯を作っていないのに彼は私に朝食を作る
しかもいつからか朝起こしてくれるようになり、それが日常となった

それからしばらくして璃玖は彼女らしき人のもとに通っていて、でも深夜には帰ってくるなんてことをしてるのに気付くことになる
それが2年近く続いてる

それなのに
これからもそれが続くと思っていたのに
今日を境目に変わってしまうなんて予測できるわけなかった

瞳の中の色は

無言の帰宅
その間ずっと腕を引かれていた
少し小走りをしなくてはならない速さだったがそれでも彼にとってはゆっくりだったに違いない
そんなことはぐだぐだ考えられるのに

なんでだろう

目の前にいる璃玖のことが考えられない。いや、考えても考えがまとまらな過ぎて、だから何も思えない
中途半端に酔っているのも原因かもしれない

家に着き鍵を開けた璃玖によって玄関に引き込まれる
そして閉じた扉に背を押し付けられながら鍵の閉まる音が聞こえた
慌てて彼を見ると璃玖も私を見ていた
なんだか怖くなって私は扉から背を離そうとした
それに気付いた璃玖は私が動けないように私の手を自分の手で顔の隣に固定されてしまった
何度か力を入れてみたが璃玖の力に扉から少しでも手を離すことすらできない

諦めた私は璃玖のことを見た
私より身長の高い彼を見るには軽く見上げるようにしなくてはいけない

そうやって見た彼は顔に何の表情も浮かべていなかった
しいて言うなら瞳が冷たかった

しばらく見つめ合ってやっと彼が口を開いた

「ねぇ……」
「……な、なに？」
「なんで……なんで今日は連絡しなかった」
「だって、連絡しなくても、いいと思ったから」
「なんで」
「……そんなに遅くまでいるつもりは……」
「……ふぅん、そう、なんだ」

温度の感じられない言葉を投げかけられ私は身が固まった
別に私は悪いことをしたわけではない
それに璃玖への連絡の重要性は低いと思ってる
……璃玖は私のことを心配するわけないから
結局はあってもなくても一緒だと思わざる得ないのは当たり前だ

「けど帰ってくるつもりなんてなかったんじゃないか」
「……は？」

「浪川と仲良さそうだったもんなぁ」
「っ……！」

耳元で囁かれびくっとしてしまった私
それに気づいた彼は喉の奥でクツクツ笑う

否定するタイミングを逃し何も言い返せなくなってしまった私は気まずくなって彼の顔から視線を外した

「ねぇ……俺が行くまで浪川と何話してた？自分のこと浪川にどこまで話した？」
「あんまり、覚えてないけど……自分のことは少ししか話してないよ。……璃玖のことも」
「そう……ならいい」

聞きたい言葉が聞けたからか
彼は何事もなかったかのように腕を退け、さっさと家に上がろうとしていた
私は驚きのあまりずれ落ちそうになる体を扉に腕をつき支えていた

結局彼は何に怒っていたのか
私には全く見当もつかなかった

私が連絡を入れていなかったことだけであんなに怒ったとは考えられないがそれくらいしか思い当たることがない
それか嫌っている私が彼の大学の友人と仲良く……なのか分からないが話してしまったこと？
とりあえず部屋に行こう。考えるのはそれからでも遅くはない
私は靴を脱いで上がろうとしたとき、体のバランスを崩してしまった

「きゃっ……！？」

床に倒れる
そう覚悟したはずなのに予想した衝撃は来なかった

「……」
「……あ、ありが、とう」
「大丈夫？」

「あーうん。ちょっとまだ酔ってたみたいで」
いつの間にかに彼が腰と腕を支えてくれたおかげで床に倒れ落ちることを免れたようだった
その事実に驚いて彼を見ると少し照れくさそうに顔を背けた
それを見て私も少し恥ずかしくなってしまいそのまま時が流れる

「あ、の……璃玖？」
「っ……何？」
「そろそろ手を離してほしいんだけど……」
「……」

手を離す素振りのない彼に声をかけた
声をかけてしばらく……これは無視されてるのかと思い始めたころやっと解放され家に上がることができた

冷たい水を飲みながらさっきのことを考える
璃玖はすでに自分の部屋に行っているためリビングにはいない

考える……どこから考えればいいのだろう
とりあえず璃玖は私が璃玖の関係者だと周りに知られたくないんだろう
だから今日も双子で同じ家に住んでいるのに他人で通した
ただそれだけ、なんだろう

そう考えると凹まざる得ない
なんで、どうしてと本人に問えたらどんなに気持ちいいか
ただ自分がそんな勇気を持ち合わせていないことにとうに気付いている

だからこんな関係が続いているのだ……彼と私は

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6507q/

鐘の音は深夜響く

2011年6月1日04時08分発行